俳句文学館

俳人協会報改題
発行所
社団法人
俳人協会
東京都新宿区
百人町3—28—10
郵便番号160
電話（03）367—6621（代）
発行人　草間　時彦
定価　100円（送料別）（年1.000円送料300円）
振替口座東京6—273番

盛況に全国俳句大会

文部大臣奨励賞に谷口氏

全国の各地域から2万余の出句

俳人協会主催、朝日新聞社後援の第十六回全国俳句大会は、今年で第十六回を迎え、九月三日（土）午後一時より東京・有楽町の朝日両聞東京本社講堂において開催された。好天に恵まれて、一時間も前から早々と席を埋める参会者で、定刻には最上段まで満たされる盛況ぶりであった。大会は、岡田日郎幹事の開会挨拶、司会進行のもとに行われた。

まず安住敦理事長から、盛会を一り、当日出句選者として予定され皆さんと共に喜ぶ旨の挨拶があ一ていた有働亨氏が風邪のために出席出来ないため千代田葛彦氏に変更されたことをのべた。次に沢木欣一大会委員長より、応募句の審査経過報告が、概略次のようになされた。

「今回は出句された方々の地域が全国的にひろがり、六、七三六通、合計二〇、二〇八句であった。この全作品を本選者のうちから選んだ次の予選者によって予選が行われた。安住敦、有働亨、岸風三楼、岸田稚魚、木村蕪城、沢木欣一、鷹羽狩行、野沢節子、能村登四郎、原裕、福田蓼汀、細見綾子、松崎鉄之介、皆吉爽雨の十四名。その方法は一つの句稿を少なくとも三名以上の予選者が眼を通し、幅広く採るようにした。その結果、二、七五二句が予選通過をしたわけである。予選通過作品は無記名でプリントし、三十二名の選者によりそれぞれ特選三句、入選二〇句が選ばれた。（秋元不死男氏は逝去されましたので選を頂くことが出来ませんでした）採点方法は各選者の特選を二点、入選を一点として計算、高点五句を全国俳句大会賞として別記の五氏が決った。

外山滋比古、五所平之助両氏の講演（二面掲載）ののち小憩、大会特選句について選者の講評があった。山口青邨氏は、いつも私の選句には共通選がなかったが今年は一句あった。もっとあって欲しい、とのべた後、一冊の句集が出来るほど投句した人があったが、確率は高く入選したようである、とユーモアをたたえながら多くの応募を希望することをのべられた。

岸風三楼氏は句評のあと、入選の秘訣を来年のためにと「字を丁寧に書くこと」を強く要望された。つづいて細見綾子氏は「千枚田一と畦も塗り余すなし」について、ある人に聞いたところ、実際には二千枚あるが、年貢をごまかすために二千枚ということになっているそうです、ということなど、あれこれ話をされ、この句は、暮らしている人の気持ち、その風景になりきっていると賞賛された。

つづいて大会賞句について福田蓼汀氏より核心をついた講評がなされた。

大会賞は、会長に代わって大野林火副会長より賞状賞品が授与された。その中の文部大臣奨励賞については、文部大臣代理として出席された文化庁文化普及課蛭田課長補佐より賞状賞品が授与、朝日新聞社賞は朝日新聞大野企画部長より授与された。各選者の特選句についても、作者の姓号が青柳志解樹幹事長より読み上げられ、全員壇上に上がり、藤野みえ子さんが代表して賞品の授与を受けた。

岡田日郎氏のハスキーな声での名司会ぶりに大会は進み、当日午後一時半締切の投句は四六六句。成瀬桜桃子、菖蒲あや、千代田葛彦氏の順で入選一五句、特選三句が披講され、最後に皆吉爽雨氏の披講と、その特選句の講評がなされた。

閉会の辞は、秋元不死男副会長をしのびつつも、今日の盛会を喜んでくれているであろうという岸田稚魚氏の言葉で、大会は滞りなく終了した。

（市村究一郎）

挨拶する安住理事長

ユーモアをまじえながら講評を行う山口顧問

受賞者代表に賞品を授与する大野副会長

文部大臣奨励賞・第十六回全国俳句大会賞

千枚田一と畦も塗り余すなし　東京都新宿区　谷口秋郷

朝日新聞社賞・第十六回全国俳句大会賞

稽古海女浮かべば花の母校見ゆ　和歌山県新宮市　尾崎晋己

第十六回全国俳句大会賞

落し文拾ひぬ人目あるごとく　北海道亀田郡　阿部慧月

涅槃図の嘆きの外に吾をおく　宮崎県宮崎市　田崎賜恵

サングラスかけ総身をかくしけり　東京都北区　河野しげ子

谷口秋郷氏略歴

本名　利明。徳島県出身、公務員（警察庁勤務）。「風」同人、俳人協会会員、昭和四十六年「風」賞、昭和四十七年俳人協会九州大会賞、昭和五十一年「風」三十周年記念俳句賞受賞。

終戦直後、大野林火著「現代の秀句」を読んで感銘、郷里において今枝蝶人主宰「向日葵」に入会、昭和二十六年上京、以後作句は断続的となるも、四十一年「風」に入会、沢木欣一、細見綾子両先生のご指導を受け、細々ながら休むことなく現在に至る。

大正十五年九月二十四日生。東京都新宿区西大久保四ノ一七〇　RD三四号。

【受賞の感想】

私は昨春来大患にかかり、一年あまり病院のベッドに明け暮れる生活を送っていたが、ようやく癒えて社会復帰の緒についたとき、思いがけず入賞の知らせを受けた。感慨ひとしおである。俳句との付き合いは決して短くはないが、道はいよいよ遠く、自然参入の思いはますます深まるばかりである。このたびの賞は、私の今後の道程に向けて、何ものにも勝る鞭たつをいただいたものと心得てさらに努めたいと思う。これまで温い目で私を見守って下さった沢木、細見両先生、ならびに今回の投句の選を賜った諸先生に、厚くお礼を申し上げる次第である。

大会当日募集句特選

皆吉爽雨選

学帽を脱ぎ少年は髪洗ふ　上村　正實

蟬逃げて幣にあたりぬ薪能　堀　文子

葡萄剪る鉄の冷えをおそれけり　細井　みち

千代田葛彦選

昼祭る入植の地をふるさとに　荒井　正隆

曼珠沙華咲きさうに日の澄んで来し　谷口　秋郷

月の山頭捨山と世には言ふ　田中　甫村

成瀬桜桃子選

庫裡の灯を消して木槿の月明り　新井　友枝

かなかなを消しに来る雨木破の関　馬淵　広子

飛魚の飛びざま見せて焼かれけり　北川　英子

菖蒲あや選

芋虫小まめに動く農夫婦　金子　翠羽

日焼児にふしぎでならぬ指五本　岡林　英子

税すこしもどりたる日の桃賞へり　石鍋　静穂

十月集

二百十日

軒深く二百十日の日当れり　浅原ちゝろ

穏かな二百十日の田水沸く

蝉捕の出で来筆塚の後ろより　有働木母寺

仲秋

中天に噴煙折るる秋の風

龍胆や日日にさびゆく高き牧

みの虫を葬る火燃ゆる園の暮　小原菁々子

爽やか

爽やかに万象レンズ入れし瞳に

爽やかに亡き師を讃ふ稿起す

かまつかに颱風来を告ぐる風　加藤　憲曠

岬

岬のびてもろにあびたる波と霧

霧からめ灯台細りゆく岬

花萩の径七曲り雨くるか　後藤比奈夫

花煙草

花煙草穂高は空の紫に

雪渓もうすゆき草も日が焦がす

日焼してなんでも上手さうに見ゆ

春夏秋冬

俳句にはうそいつわりなしに人間が表れる。俳人に大切な資質はいろいろあろうが、せんじ詰めればその人に備わった〝艶〟ということになろうかと思う。

人間はいろいろな虚飾を着て生きているが、一切の虚飾を剥ぎ取ってしまうと残るものは結局〝艶〟の有る無し、濃い淡いだけ。九十歳を超えてなお「空蟬を愛し人間にも飽かず」とうたう富安風生の、年とともに深まる人生の〝艶〟は、いったいどこからくるのだろうか。

「幹に寄りて齢を愛す秋湖の前」（昭和四十年作）を自ら註解して「傘寿を超えてしみじみとわが命を愛しむという感懐は深くなるばかり」といっている。風生俳句には一貫して「老の自覚、「惜命」の気持ちが流れている。それは齢や命に執しているからではもちろんない。案するに、事に執着せず、流れに身をまかせる生き方が生んだ〝艶〟というものであろう。

俳句への打ち込み方には二種類あって、風生俳句の場合は俗事多忙の間にうたう「かたわら俳句」の代表とされているが、官吏としての実人生においても事に執せず、「静かに歩を中道にとどめ、驕がず、誤らず」（虚子の言葉）生きた。

実人生でも俳句でも、風生は周囲と適度な距離を保って心を遊ばせつつ、周囲から心の栄養になるものを不断に吸収する柔軟さを失わなかった。このような自然にして絶妙な生き方から、年とともに深まる〝艶〟が培われたのであろう。

（堀口蝶）

古い俳諧の世界から、俳人の美意識を解放した
秋櫻子の全著作の集大成！

■第一回配本＝十月十日発売
第九巻　鑑賞一
新修三代俳句鑑賞（春・夏・秋の部）

水原秋櫻子全集
講談社版　全二十一巻
■定価各巻二、九〇〇円

●全巻編成
第一巻　句集一
第二巻　句集二
第三巻　句集三
第四巻　句集四
第五巻　句集五
第六巻　俳論
第七巻　作家論
第八巻　古典評論
第九巻　鑑賞一
第十巻　鑑賞二
第十一巻　鑑賞三
第十二巻　美術評論
第十三巻　自句自解
第十四巻　入門・吟行・添削
第十五巻　俳句作法
第十六巻　随筆一
第十七巻　随筆二
第十八巻　紀行
第十九巻　自伝回想
第二十巻　日記
第二十一巻　雑集

講談社

「俳句」創刊25周年記念出版
愛句愛好者待望の実用辞典!!　俳壇の総力を結集した俳句文芸のすべて!!

現代俳句辞典

「俳句」九月臨時増刊
A5判四八〇頁／定価一〇〇〇円／九月五日発売予定

【特色】
●明治・大正・昭和三代の俳人、俳誌、俳句用語等一七五〇項目を収録。それぞれに適切な解説を付す。
●忘れられた明治・大正期の俳人および埋没俳誌をも発掘登載。
●俳句用語を平易に解説、実作および鑑賞の手引とする。
●口絵に俳人筆跡、主要俳誌創刊号、主要俳書等の写真を収録。
●付録に、俳諧発生から昭和52年までの俳諧・俳句年表、主要俳書一覧、全集講座類一覧、俳誌系図等を収録。
●巻末に五十音順索引を付す。

予約募集中／最寄りの書店または小社通信販売課へお申し込み下さい。

102　千代田区富士見二ノ十三ノ三
角川書店
四二六五—七二一一

全国俳句大会での講演要旨

壇上の外山氏

壇上の五所氏

「言葉雑感」

外山滋比古

九月三日、東京・有楽町の朝日新聞東京本社講堂で開かれた全国俳句大会で、外山滋比古、五所平之助両氏の講演が行われた。

外山滋比古氏の講演は「言葉雑感」で、「ふびと」と「かたりべ」から今後の短詩型文学について要旨次のようにのべられた。

「ふびと」は漢字的で「かたりべ」はかな文字的である。「ふびと」は男性的であり「かたりべ」は女性的といえる。現在日本女性の大声には外人も首をかしげる。その反面男はいよいよ小声となってくるのが目立っている。同時に若者を中心とした日本語の混乱が云々されているが、総じて三十歳以上の人達の「目で見る言葉」に対して三十歳以下の「耳の言葉」という、年齢的にも差が生じてきた。大正十二年に座談会を雑誌にのせたのは菊池寛である。現在座談会そのものの本が売れている。これらは多分に「かたりべ」の要素を含んでいる。著書も聴覚的言葉が一般に受けるようになり、以前放送作家であった者の著書が多くのファンを得ている。

明治以来視覚的言葉に頼った現代詩が、そのリズムを失って多くの読者を失った。今までの日本語の島国の閉鎖的な言葉、そしてその洗練された言葉に対して、現今の「耳の言葉」を単に混乱と見るのは早計である。「耳の言葉」は流動的、開放的な戸外の言葉である。だから今までに洗練に洗練された言葉と、流動的な戸外の言葉とがぶつかりあい、つまりは「ふびと」と「かたりべ」とが緊張した火花を散らすことによって、不調和の調和が生まれ、混乱と見えるものから豊かなものが育つのである。平安朝文学が「かな」と「漢字」が火花を散らしたことによって見事な開花をなしとげたことを思えば、明治以来のわが国の言語的大変化は、むしろ千載一遇の時と言えるのである。

俳句は子規によって革新されたが、明治以来百年も経過している。子規スタイルに代る新しいスタイルが発見されなくてはならない。俳句は世界に類のないすばらしい短詩型文学である。ヨーロッパの詩人生命の短いのにくらべて、俳句は若いてますます良い作品を生むことが出来る、ということも大いなる特長である。

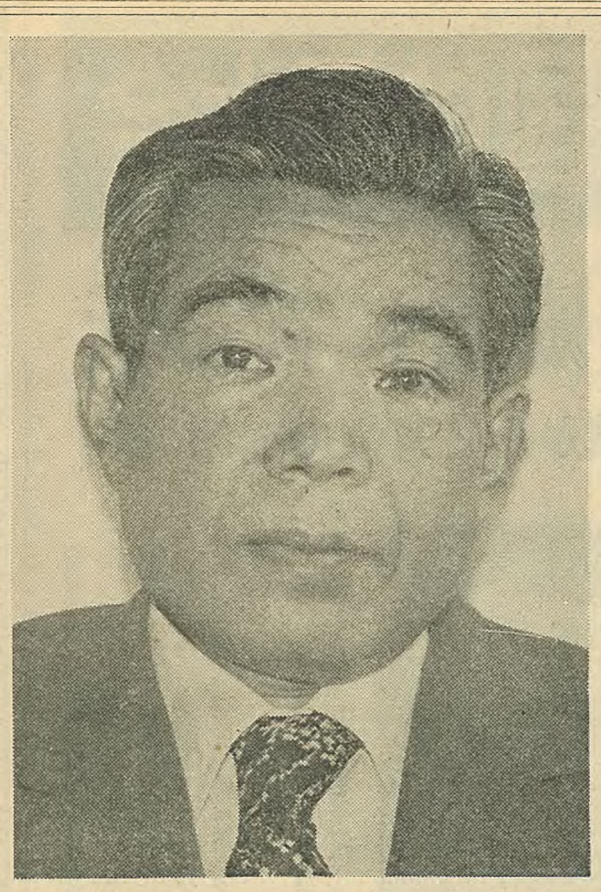
新しい「耳の言葉」を取入れ、日常の言語に足をおろした、新しい俳句が生まれることを期待したい。

以上のように結んで壇を下りられた。満場の拍手は鳴りやまなかった。

「映画のなかの女性」

五所平之助

つづいて五所平之助氏は「映画のなかの女性」と題して、田中絹代の子役時代からの話をされた。九十七本の映画のうち二本が「お蔵入り」、つまり「没」になってしまった面白い秘話を挿入しながら、自分は田中絹代をとおして自分を表現したかった。それに



顔

深まる自然参入の思い

谷口秋郷

④

本年度、俳人協会全国大会文部大臣奨励賞受賞者。千枚田一と睦も塗り余すなし　秋郷

大正十五年生まれとあるから、今年、五十二歳。終戦直後、郷里福島で大野林火著「現代の秀句」を読んだのが俳句との縁のはじまり。現在は俳誌「風」の同人で、沢木欣一、細見綾子門。能登の千枚田の句で文部大臣奨励賞を得たのも、句集「塩田」の著者、師沢木欣一に連なるものであろうか。

本職は警察官。しかも、警察庁の警視長というえらい人。現場からたたき上げて、警備畑を専門に歩いたベテラン中のベテラン。しかし、俳句を語りつつの笑顔は子供のように無邪気である。

昨春、大病をして死にそこなった。病院のベッドでの明け暮れがこの人の笑顔に重厚さを加えた。

その代わりに庫せて、身体が小さくなった。四年ぶりで会った筆者は人違いをした。

「漸く癒えて社会復帰の緒についたとき思いがけず入賞の報せを受けた。感慨ひとしおである。俳句との付合いは決して短くはないが、道はいよいよ遠く自然参入の思いはますます深まるばかりである。」というのが受賞の弁。

東京都新宿区に住む。（草間）

「四季随筆」に新年の部を追加刊行

俳人協会編、東京美術刊行の「四季随筆」はすでに春、夏を刊行、秋も間もなく刊行され、冬はすでに編集すみとなっている。好評のため、新たに新年の部を刊行することになり、原稿集めに入った。

「四季随筆」編集長宮下郁舟氏は次のように、会員諸氏にお願いしている。

「新年は題材が限定されているだけに、原稿を集めることが難しいようです。各地の珍しい正月の行事を書いた随筆がありましたら、ぜひ、編集部まで教えて下さい。会員の書かれたもので、俳句雑誌に既発表のもの。ただし、採否はこちらにお任せ願います。」

富安風生全句集の表紙

は相手の田中絹代は勘が良いし、反射性が良く、手の先、足の先まで芝居のできる人だったので、楽しく勉強が出来た。初めてのトーキー「マダムと女房」では、田中絹代の下関なまりが心配されたが、結果的にはそれが良かった。最近になって、目が見えなくなったが、それでも芝居をやりとおして、数々の賞に輝いて、三月二十七日に逝去された。自分としても二人で勉強してきた甲斐があったと、悲しみの中に喜びを見出している。

と結んで、これまた拍手の渡を呼んだのである。（市村究一郎）

図書受贈

七月以降、次の諸氏からご著書またはご蔵書を寄贈していただきました。ありがたく御礼申し上げます。（敬称略、受贈順）

磯野光山、平松措大、雪解要行所、松崎豊、宮下郁舟、新潟俳句会、杉山玲羊、西郷静子、田中勇詩、高木喬、松岡緑男、渡部伊世路、松野信吾、古川白雨、石原八束、小田美希次、桜井博道、大野林火、青木雨洲、中村四峰、北海道俳句会協会、川戸孤舟、中村耕人、松島待閑子、兎内義光、水野吐紫、桂檀蹊子、小林緑雨、三重県俳句協会、高橋北斗、野竹雨城、浦和市俳句連盟、赤堀春虹、加藤水虹、和田悟朗、加藤よし二、佐々木晴渉、石原舟月、杉山青磁

天狼俳句会、中村雪枝、秋山珠樹、加納ツネ、風間我国、本多重郎、山本痴花、七曜俳句会、富岡牛歩、十符の里吟社、川崎展宏、雑加茄子王、中部女流俳句会、大阪茶の間ペンクラブ、有斐閣、浦屋黛、金子兜太、寒川北嶺、車谷弘、鈴木桜子、明治書院、草間時彦、村山古郷、三菱重工本社俳句会、村山一棹、宮崎県俳句協会、白洲堂書店、中川忠治、俳文学社、水葱俳句会、府中市俳句連盟、田中貴代子、俳人協会、木下杏雲、花屋福、佐々木あきら、沖青魚、相川南陽、渋柿社、田中明、小路紫峡、牧羊社、宮岡計次、木村伊久男、町春草、鶴村松一、卜蔵一美、中野祥子、木村敏男、北村香朗、中村花枝、山本容子、宮川喜代江

服部翠生、高村圭左右、浅野正、笠原古畦、武田みさ子、八十島稔、渡辺春輔、天狼俳句会香川支部、榛谷三枝子、立石博、秋田県俳句懇話会、松崎鉄之介、高橋晶子、佐藤史郎、新評論社、新井旧泰、河部みどり女、桝岡泊霽、横山仁子、春邑枝、佐々木俊子、河野柏肥、沢木欣一、中川清之、諸橋和子、皆吉爽雨、三代直恵、川端むいつ、川村紫陽、金子無恵子、桟渓狼、小沢游湖、向野楠葉、原田走日朗、中島昂、鈴木蕚、麦の会青年部、竹の会、吉野彰、堀口爽青、杏田朗平、加藤康人、鈴木布美、後藤比奈夫、福沢伊登子、高沢信一郎、小山知子、太田潤山、橋本正臣、小鷗会、加藤丈青、八田一朗、二月会、日本住宅公団いえなみ句会、求竜堂、池月一陽子、菊川芳秋、川越蕎生、河野南畦、高田秋仁、雲斧会、文芸出版社、伊藤敬子、樋笠文、岡本信男、桂信子、久保田月鈴子、小山宗助、埴玉馬、酔木会、松本丁雨、向笠和子、渡辺秀二、猿田禾風、濤発行所、山脈発行所、古賀まり子、間貞敏、高桑義生、桑原視草、奥田杏牛、広瀬河太郎、林徹、ぬかご社、鹿山隆寿、土合寛城子、山本古鳳、藤川碧魚、永井千代子、今村俊三、秋元不死男、久仁崎正

佐伯巨星塔、落合雅子、黒田忠次郎、桜楓社、山下麦秋、矢ケ崎千枝、講造社出版、大谷桃村、山田賛好、笠原古畦、上田紀代、神原栄二、稲垣きくの、併和久仁子、手塚美佐、高仲不墨子、風鈴編集部、東福寺薫、椎野八朔、奥山宗助、埴玉馬、酔木会、松本丁雨、向笠和子、渡辺秀二、猿田禾風、濤発行所、山脈発行所、古賀

（以上9月18日現在）

季題の意味を問い直す

『富安風生全句集』

最近でも四季別句集の刊行はなくはないが、季題別句集の刊行はじつにめずらしい。

句集の編集が年代順になったのは作家の足跡、成長、変化を知るためには便利であり、文学の形式が個人単位になったので、それはやむを得ない編集であるとも考えられよう。こうした時代、状況の中で季題別句集を刊行できる俳人はごく少数の大家に限られるといえるかも知れない。

高浜虚子は俳句は季題の詩であるといった。このたび虚子門の高弟として生涯を歩んだ富安風生が季題別句集を刊行したことは俳句の本質的な文学形式を問い直す意味でもまことに意義深い快挙であるといっても過言ではあるまい。

たとえば「梅」という一季題二百数十句が並んでも一句一句が作品として耐え得るということは後進の私たちには驚きに近いことでもある。本句集を手にして俳句における季題とは単なる約束ごとではなく、俳句そのものを成立させる詩の本源であることを多くの人は認識するに違いない。季題を軽んじて俳句はない。俳句にとって季題がいかに本質的なものであるかを考えさせ、問い直す資料としても本句集刊行の意義は深く、今日の俳壇にあたえる影響は極めて大きいのではないだろうか。

（岡田　日郎）

菜穀火二五周年三〇〇号記念

野見山朱鳥遺墨展

とき　十一月十一日～十三日

ところ　俳句文学館（新宿区百人町）

「苦悩や悲哀を経て来なければ魂は深くならない」と叫び、「なさされは極寒の岩裂けることも」の一句を絶筆として五十二歳の若さで逝去した俳人野見山朱鳥が、生前かき残した作品の中より極彩色水墨画平折、茶掛と版画、色紙、短冊六十余点を併せて展覧いたします。何卒知人お誘いの上、ご高覧賜り度く御案内申し上げます。

主催　菜穀火社
後援　俳人協会

故石川桂郎展

とき　十一月十九日（土）、二十日（日）午前十一時より午後四時まで

ところ　俳句文学館

十一月六日は故石川桂郎の三回忌に当たります。ここに石川桂郎展を催して師を偲び明日の「風土」へ邁進したいと考えます。

当日は師が愛用の筆硯、ぐい飲み、遺作品として絵画、色紙、短冊、原稿、手紙等、大方のご協力を得て展示致します。

また石川桂郎展の一環事業として風土俳句編「含羞抄」を刊行致します。

風土俳句会

俳人協会主催　岡山懇親吟行会

このたび、岡山でははじめての懇親吟行会を開催します。ご出席をお待ちします。

会場　岡山市古京　後楽園　鶴鳴館

日時　十一月六日午前十時受付　午後零時三十分投稿締切。午後四時散会。

選者　岸風三楼　村山古郷　梶井枯骨　神保百合一

角南星燈　吉備猿彦　坂田茅子　水野淡生　井上杉香　浅原ちちろ　平松草山　小寺冬至　藤原大一（順不同）

投句　一人五句　会費　千円（当日持参）

表彰　俳人協会岡山懇親吟行会賞　県知事賞　岡山市長賞　山陽新聞社長賞　山陽放送賞　NHK岡山放送局長賞　他

備考　晴雨にかかわらず実施　会後　有志により懇親会を開く。会費三千円　十月末までに連絡先に申込みのこと。

連絡先　浅原ちちろ　岡山市西古松四六―二　電話　〇八六二―二二―五〇六二

延二〇〇余名の代表作が一堂に
全俳人・文筆者に待望の必読書
俳人協会編
四季随筆（秋）
●10月下旬刊行／B6判／定価1、500円
■何回読んでも良い作品、或は読みたくともどこにあるかわからなかった名編の数々……。俳人協会に結集する多彩な現代俳壇の中心メンバーの力作を網羅し、春・夏・秋・冬に分類して刊行する「四季随筆」！〈春〉〈夏〉に続く〈秋〉の刊行。
●家作録収（秋）筆随筆四季●
初秋　阿部みどり女　星野立子　岩崎健一　石塚友二　斎藤夏風　下村ひろし　秋元不死男　吉野義子　黒田櫻の園　浦野芳南　米谷静二　阿波野青畝
仲秋　富安風生　山口青邨　大島民郎　宮津昭彦　西山誠　皆川白陀　柳田静爾楼　池上樵人　牛山一庭人　野沢節子　堀古蝶　柴田白葉女　相生垣瓜人　平井さち子　村山古郷　阿波野青畝
晩秋　水原秋櫻子　星野立子　安住敦　香西照雄　大串章　野見山朱鳥　石川桂郎　大竹きみ江　百合山羽公　宮野小提灯　神蔵器　橋本鶏二　下村梅子　根岸喜雄　福田蓼汀　富安風生
東京美術
東京都千代田区神田司町2―7
振替／東京3―13186
電話／（03）292―3231

文部大臣奨励賞に長野氏

俳句文学館で 第4回福祉全国俳句大会

第四回福祉施設全国俳句大会は、さる九月十二日、東京・百人町、俳句文学館大会議室で各賞が発表され、同時に表彰式が行われた。

大会の応募には、全国の老人施設、および地域老人クラブが参加、応募句六、〇〇〇余句にのぼった。これを松崎鉄之介ほか六名の予選を通過した作品、一、一四七句を本選者である阿波野青畝先生ほか七名の先生に送付、本選をいただいた。作品は一般に一歎き」「泣き」がなく、明るく前向きの作品が多かった。

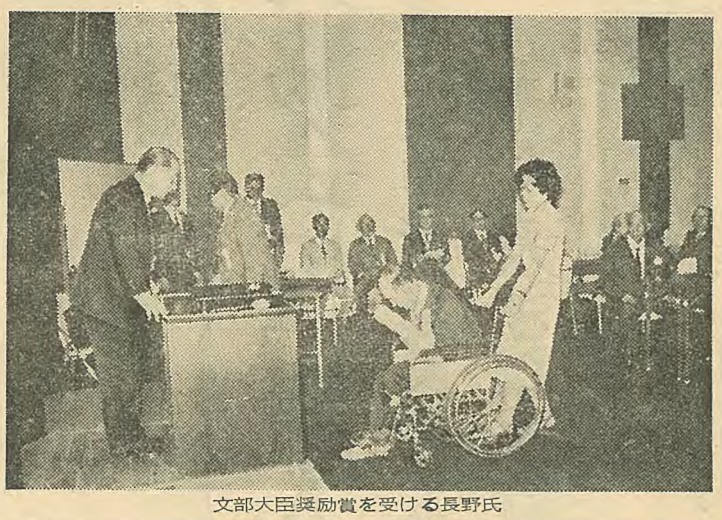
当日は、先に発表した年の花年間作品賞五名の表彰もあわせて行われた。

大野年の花委員長談

「本俳句会も第四回を迎えて、数が増加したばかりでなく、質的にも著しい進歩をしました。ことに老人だからという甘えどころが見えなくなったことは注目したいと思います」

文部大臣奨励賞
あはあはと年暮れてゐる膝頭
清瀬市聖ヨゼフの園　長野喜代計

全国社会福祉協議会賞
見舞いたき人ばかりなり夕桜
群馬県栗生楽生園　森つや子


文部大臣奨励賞を受ける長野氏

福祉新聞社賞
椴松の雪玲瓏と大且
札幌市清幌園　藤岡　紫陽

俳人協会賞
夫手術してより夏蟲減らしけり

島根県大田市寿会　竹下水運
形代を流してよりの沖の雨
宮崎市銀星クラブ　松浦あきの

年の花委員長賞
くちなしや女のための百度石
大阪市　平野　仙水

年の花委員賞
燭継ぎてミサ続き居り風冴る
山口市　橋場　五枝
那智黒の小石伝いに梅雨の蝶
摂津市いぶき会　岩田　定子
拡大鏡はなせば読めず秋の暮
清瀬市聖ヨゼフの園　西　いね

なお、本年度の選者は次の先生にお願いいたしました。

阿波野青畝、安住敦、石塚友二、大野林火、平畑静塔、福田蓼汀、皆吉爽雨、細見綾子。

加藤、服部氏に
兵庫県ともしび賞

兵庫県俳壇の加藤不二也（水明）＝元神戸俳人協会理事長＝、服部嵐翠（潮騒）＝同誌主宰＝の両氏は、兵庫県第三回ともしび賞（文化賞に準ずるもの）を受けることに決定、さる九月二十七日、同県から発表された。ともしび賞贈呈式は、十月十一日に行われます。

（明石・大川記）

随想

テレビ映画と鳥の声

小林　清之介

テレビ映画の「刑事コロンボ」に、野鳥の声が入って、都市郊外ののびやかな感じをよく出していた。日本のテレビ映画も、このごろは野鳥の声をよく使うようだが、不馴れなためか、すいぶんひどいことを平気でやる。

すっかり白けてしまった。

私は子供のころからチャンバラ映画が好きで、今でもよく見る。頭の疲れたときにはこれが一番だ。殊にこの映画には、無声映画時代からお馴染の片岡千恵蔵が出ているので、毎週楽しみに見ていたのである。次の週、やはり同じ番組の、これもとホトトギスの声が響いて来る。なんともおかしな場面であった。主役の高橋英樹扮するところの浪人が、不幸な人の身の上話を聞いてやるところで、登場人物は深刻な顔をしている。しかしつづけざまに真冬のホトトギスを聞かされて、こちらはやはり冬景色のなかで、今度は「カッコウ、カッコウ」とカッコウが鳴き出した。局は日本テレビだったが、製作は東映だから、恐らく東映の映画監督か誰か、鳥に関して何も知らない人が、「ここへ、鳥の声を入れようじゃないか」というようなことで、ホトトギス、カッコウのご登場となったのだろう。

このごろは、野鳥の声の録音テープやレコードがあちこちから売り出されている。それを使って場面効果をあげようという思いつきは、けっして悪くなかったのである。しかし真冬に夏鳥を鳴かせるのは無茶だ。ホトトギスやカッコウは秋の季に日本を去って、南洋諸島へ渡ってしまう。次の年の初夏まで、どこを探しても、これらの鳥はいないのである。

この場合、まわりが冬景色なのだから、「チャッ、チャッ」というウグイスの笹鳴きか、冬モズの「ギョッ、ギョッ」という警戒音でも入れるべきだった。あるいは「ツー、ツー」という、数羽のシジュウカラの地鳴きを入れてもいい。もっとにぎやかな鳴き声がほしいというのなら、「ピーヨ、ピーヨ」とヒヨドリの小群が鳴き交わしている声を入れたらいいだろう。遠くの木立で鳴くヒヨドリの声はかすかなささやきのように聞えて、これまた趣がある。

その代わり、そういうものを使おうと思ったら、冬の間に録音して置かなくてはならない。市販のものは概してさえずりばかりだから、冬には使えない。

もう何年も前のことになるが、コジュケイの「チョットコイ、チョットコイ」という鳴き声をとり入れた時代劇があった。コジュケイは四季いずれの従にも鳴くから、季節の点に不都合はないが、実はちょんまげ時代の日本には、この鳥はいなかったのである。コジュケイは大正時代、雉鳥として中国南部から輸入された。それが少しずつ逃げ出して野生化し、日本の野鳥となったものである。

十月の忌

波郷俳句の中に遊んで…

石田あき子

石田あき子さんが波郷七回忌を目前に、先生の後を追うように亡くなられたのは、昭和五十年十月二十一日の落葉の激しい夕方であった。まもなく三回忌が廻ってくるが私には何もかも昨日の出来ごとのように思えてならない。ちょうど亡くなられる前日であった。壺一杯に挿した白菊に見えない筈の目を見張って「まあ奇麗。今日はとってもよく見えるの」と奇蹟のような事を言って驚かせた。

「手曳かれて菩女にも似たるおぼろかな」の句があるように彼女の目は半年も前から光を失っていた。背中を撫でていると、思い出したように、「里芋やにんじんの煮たのが食べてみたいの。薄味にして、鳥も入れてね……うちの主人も好きだったのよ。煮染芋の句沢山あったでしょう。それから熱つうい鯉とても」……低いながらもまだしっかりとした話しぶりであった。

あき子さんの胃はもう半年も前から食物を受けつけず、止むことなく高蛋白の栄養食を管で直接胃に送られているという状態で、まだこんな食恩の起こるのも不思議な事である。「ハイ、ハイ沢山煮て来ますよ」というと大変満足そうであった。

私はふと先生の句集酒中花以後の、それも終りに近く、「鯉とくの食いたき日なり普羅忌なり」のお句のあった事を思い出して、深い憂情で結ばれた御夫婦というものはこんなにも似通うものかと驚くと共に、生死の境にありながらなおも御主人のお好きだった食物が脳裡から離れない彼女に女の業を見る思いであった。そして次の日彼女は御主人の元へ逝ってしまった。

二言目には、「うちの亭主が」と「御主人大事」に生き抜いたあき子さんの安らかな死顔を見つめつつ私はふと、昨日はもう彼女の魂はこの現し世を離れて、ひとり波郷俳句の中に遊んでいたのではなかろうかと思えるのであった。

ひとたびは夫帰り来よ曼珠沙華
あき子

（塩谷はつ枝）

創刊号物語 <4>

渋柿

「渋柿」の創刊号は、大正四年二月十日付で発刊された。編集兼発行人は、横須賀の住人で海軍に勤めていた大塚菜浦。表紙は、中央に「渋柿　第一号」とゴシック文字で大書してあるだけ、渋柿おなじみの夏目漱石の題字は、第三号からである。

扉には

とのゐのあした　侍従して
ほ句奉るべく御沙汰蒙りければ　かしこまりたてまつると
て　渋柿のことぎものにては候へと

とだけある。知られているように大正三年某日、侍従の甘露寺伯爵を通し〝俳句をみせよ〟との勅諚をうけ、さしだした句の中の一句である。東洋城は創刊に際し、主義・主張らしいことは何も述べていない。おそらくこの一句をもって「渋柿」創刊の意味と、今後あるべき渋柿俳句の行き方を語らしめたのだと思われる。

本文第一頁からいきなり雑詠欄に入る。実作第一主義を語るこの形式は、今も変わらない。出句者は村上鬨月の前々の城主の寺の銀杏かなにはじまり、東洋城自身の河豚の毒放蕩の血を伝へけりで終わっている。

文章は、まず日記風の「筏の舎漫筆」。筏の舎とは、東洋城が住んでいた築地河岸の家を、その辺りのさまからとって称したもの。筆者造酒允は東洋城の筆名である。次の「解剖台上の女」とは、インターン南仙臥の掌編小説である。「花の日に」は、編集者菜浦が記した句会の思い出で、碧梧桐の新傾向が風びした頃の「国民俳壇」、「渋柿」創刊前の様子がうかがわれて興味ふかい。句会場は、横浜の松浦為王宅。顔ぶれは、東洋城・蛇笏・月舟・零余子・瓜鱗・為王・朔力・断腸花・普羅・菜浦などである。次には、村上鬨魚の短歌が二段組三頁にわたって掲載されている。このように、俳句・短歌・文章の併載が、しばらくつづくのである。

各地の例会報は、まだ子規会（横浜）・春涛会（横須賀）・雪輪会（足利）・鬼灯会（相模模）の四会だけだ。東京の初句会は、築地明石町の城庵で催され、東京の喜舟・仙臥に、足利・横須賀の八名が出席し「午前十時から午後十一時まで句作に没頭した。それから三時間ばかり俳談をした。全く寝に就いたのは、翌午前三時であった。あの城庵の二階にも下にも蒲団を着てごろごろ休んだ」とある。東洋城が三十八歳、他は二十台・三十台だったわけだが、この猛鍛練の伝統は少数者によってずっと守られてきており、雑誌もまた厚くもならず消えもせず、戦災中も一号も欠号なく、延々と今日に及んでいるわけである。

菜浦の記している「編集後記」は、当然に東洋城の意向、渋柿の方向を体して言っていると思われるので、抜き書きしてみよう。

・一月二日、岡部杜城が上京して明石町の城庵を訪ふた。そして更に横須賀に来て本誌発刊の熟議を凝らした。で、漸く二月十日に創刊することとなったのである。

・本誌の主義や主張は今更茲で警言を費す必要はない。本誌を繙けばすぐ明らかに解る。

・本誌は売って儲けて喰はうというのではない。買手がなければ売らないのだ。売れないからと言って主張を代へたり廃刊したりする雑誌ではない。買って貰ふために某人の作品を御世辞的に掲載する様な事はしない。気に入らなければどしどし捨ててしまふ。只気に入った人と共に気に入った作品を公にするのだ。他人の容喙は許さない。某所に犯すべからざる権威があるのだ。

・渋柿は渋いのである。樽につめられたり、皮を剥いて干されたりすると甘くはなるが、さうなればもう渋柿ではない。即ち樽柿なのである。干柿である。而して渋柿は何処までも渋いのである。柿の渋さを本誌は尊重するのである。

・本誌は敬人の句に疏て種々の方法の下に研究してゆきたいと思ふ。今の俳人は作るに急にして古句の研究を忽諸に付している様である。まことに概嘆に堪えない。其の研究方法は次号に発表する。

「編集後記」の後に「募集」があり、一季題各十句を募集し、選者として、まず村上鬨月・小林脩斎・野村喜舟・青木月斗・南仙臥・清水鱸江が発表されている。また、よその雑詠欄に当たる東洋城選の「巻頭句欄」の募集は句数無制限、よい句ならば何ページでも掲載する、というわけである。裏表紙は、「柿」を詠った芭蕉・去来・蕪村・子規・漱石の各一句を並べている。この顔ぶれは、けっして時代の常識ではなかったと思われる。

「渋柿」の創刊は、欧化の時代思潮の中で、東洋的境涯の詩境を復興しようとするところにあったわけだが、東洋城のその鋭鋒は、創刊号ではまだ現われていない。誌代十二銭。

（不破　博）

☆　☆　☆

「渋柿」創刊号の表紙

53年版俳句カレンダー頒布

一　体　裁　例年の通り　多色印刷十二枚綴り壁掛
二　内　容　記事参照
三　頒　価　一部　一〇〇〇円
四　送　料　一部三百円、二～四部六百円、五～十部七八〇円、十一～十五部九百円、十六部以上
五　実　費　（以上荷造費と平均送料額）
　　申込先　各結社または俳人協会　十月中旬刊行

現代俳句選集第五集

現代俳句の金字塔。全会員のアンソロジー。残部が少々ありますのでお領けします。
上下二冊一組　五千円　送料千円。
申込先　東京都新宿区百人町三―二八―一〇
俳人協会

有働亨午前中の俳句教室

午前中の講座をというご希望に応えました。毎月一回です。
講　師　有働亨　連続講義（六回）
会　場　俳句文学館　時間　午前一〇時より正午
開講日　十月八日（土）より毎月第二土曜日　三月まで六日開講
受講料　六回　五〇〇〇円（協会員四五〇〇円）
申込先　俳人協会　講座係

清崎敏郎俳句教室

講　師　清崎敏郎　連続講義（五日）
時　間　午後一時三〇分より四時まで
会　場　俳句文学館
開講日　九月二六日（月）一〇月三日（月）一〇月七日（金）一〇月一四日（金）一〇月二一日（金）
受講料　全五回　四〇〇〇円（協会員三五〇〇円）一回　一〇〇〇円（協会員八〇〇円）
申込先　俳人協会　講座係

鷹羽狩行俳句教室

講　師　鷹羽狩行　連続講義（五回）
時　間　午後一時三〇分より四時まで
会　場　俳句文学館
開講日　一一月一日（火）一一月八日（火）一一月一五日（火）一一月二二日（火）一一月二九日（火）
受講料　全五回　四〇〇〇円（協会員三五〇〇円）一回　一〇〇〇円（協会員八〇〇円）
申込先　俳人協会　講座係

町春草書道教室

指　導　町　春　草
会　場　俳句文学館
時　間　午後一時三〇分より四時
開講日　毎月第二月曜　第四月曜　受講料　六カ月（十二回）一五〇〇〇円（ほかに教材費若干）
申込先　俳人協会　書道教室係

俳人協会に「新人賞」

各県に図書専門委員設置も決定

「若い人」へ　大きな期待寄せて

俳人協会は従来の俳人協会賞に加えて、新人賞を設定することとなり、十月一日の理事会で正式に決定した。本年より実施の予定。

新人賞は新人を世に送ることに目的があるが、本賞の設定によって、俳人協会賞そのものの性格も明確になることが考えられる。このことについて大野副会長は次のように語った。

「新人賞として若い人が出てくることを期待しています。新人とはなにかという区別は、明文化せずとも、選考の段階でおのずからはっきりしてくると思います」

選考は十一月初旬に予備選考委員会、十二月三日に本選委員会を開催の予定。

なお、理事会は、図書委員会の下部組織として各県に図書専門委員を置くことも決定、その人選に着手することになった。

親父さん

秋元　近史

故秋元不死男氏

横浜の根岸に越して来たのは私が六歳、おやじは横浜大災に勤務していた。病弱だった私に医者が海に近いところをすすめたからである。道路一本ですぐ前が海だった。玄関の標札の秋元不二雄と並んで東京三という見知らぬ名前があった。あとになって、おやじの俳句の名前ということがわかったが、しばらくその名前が何であるかわからなかった。それが、おやじの俳句と私の最初の出逢いであった。

横浜市、東京三様で郵便が届いたという位だから郵便の量はすごかった。「ばらのはなゆらゆらゆれる朝風に」という俳句を小学校一年のときに作った私は、おやじはすこぶる気嫌がよかった。俳句に関心をもちだしたということの喜びであったのだろう。が残念ながら私は俳句に走らず音楽に走り、テレビ局の演出を始め、「シャボン玉ホリデー」という番組を十年続けた。西東三鬼先生の「断崖」に投句をしていた時期があった。おやじはまるで無関心でいたが、ときたま私の俳句ノートに赤鉛筆ではっきりおやじとわかる字で添削がしてあった。

ストローを珈琲のぼる稲光り

（昭30年）

いまここにその俳句ノートがある。不思議なことに、どこかへなくした筈だったその俳句ノートが、おやじの死ぬ三日前に偶然みつかった。「センスがない。あんたは俳句をやめなさい」と、おふくろに言って俳句を断念させたおやじだったが私にはとうとう云わなかった。ことによると、テレビの演出に走ったことを喜んでいたのかも知れない。

マイ、ウエイ……。俳句の道を進み生涯をつぎ込んだおやじさん、立派でした。

おやじさん、俺はテレビの道をゆきます。

本年度新会員ご紹介⑤

俳人協会関西支部は、八月二十三日（火）午後六時より、肥後橋の住友クラブで本年三回目の幹任委員会をひらいた。出席者は十六名。

目前に迫った第四回関西俳句講座（九月五日～）の諸事打ち合わせ、十月八日より京都で開催の色紙短冊展示頒布会への協力、来春四月第三日曜、大阪における第十三回関西俳句大会の選者、来年度の懇親吟行会を和歌山で催すことなど、当面の支部行事について討議、活発な意見が出された。

来年度の行事については後日改めて委員会をひらき、詳細を決定する。（森田帳・報）

来春の大会へ準備

関西支部　活発に常任委活動

植平桜史　佐藤悠々　鹿内とも　北野石竜子　迫牛彦　志田吉海　青野麦秋　新田千鶴子　山本桑子　吉川陽子　梅沢糸川　新如峯田辺亜Q　高橋好子　平三好　木村富男　小林銀女　伴野渓水　新田久子　岡村佐月　小池一平　佐野操　高橋一天　瀧柊二　野中陸三　広谷春彦　藤原嶺人　若色如月　併和久仁子　高島信一　高原しげ子　村岡悠　水沢竜星　吉村芳子　和田しずえ　森川光郎　加福雷太　青山丈之助　東羊一　田村おさむ　土山しげを　友沢白容　中尾文泉（訂正　七六号所載の「前沢典子」は「藤沢典子」、七七号所載の「大沢一朗」は「大沼一朗」、「田中黒土」は「田中黒土」の誤りでした。）

俳句カレンダーの表紙できる

書は町春草さん

柳ケ瀬で第三回色紙短冊開催へ

岐阜県だより

県俳人協会は、会員の親睦をはかるため、第三回色紙短冊展を、この十月三十一日より六日間、柳ケ瀬中電センターで、会員とその師系に当る方々の作品を展示することとしている。会場では質問コーナーを設けて会員が、これらの説明にあたるなどして、毎年好評を博している。

県俳句作家協会は、昭和二十五年に設立されて以来、その事業を活発に推進してきているが、その一つとしての年間句集「岐阜俳句」も本年で二十二集を重ねるに至った。それを記念し、このほど芭蕉の句碑〝宿りせむあかさの杖となる日まで〟を岐阜の妙照寺に建立した。また同協会は最近、四部理事制を採り、その新体制のもとに一層の発展を期している。

なお「濃飛の俳書展」が県立図書館で開催されるとともに、利彦著「正岡子規の研究」が文部大臣賞を得た祝賀会や、吐紫の「大舟小舟」を始めとした多くの句集が出版されたが、今秋にはさらに、一鴻句集「輪」の出版記念会と員寄風二百号俳句大会を、林火を迎へて行われようとしている。また俳人協会員である大洞真弧が亡くなられた。

千4百人、7千余句の応募

＝第4回九州俳句大会＝

予選を終わりたゞいま本選中

第四回九州俳句大会の応募句は、全国俳人の御協力の下に、八月末日消印をもって締め切りました。一四二二人、七千余句の応募があり、すでに予選を終わり、目下本選中でございます。発表当日は左記のような行事がありますので、ふるって御参加下さい。

▽発表　十一月二十七日（日）午後一時より鹿児島市山下町十三、鹿児島県消防会館ホールにて

▽講演　阿波野青畝氏・川越政則氏

▽当日句会　投句　締切一時半（一句）

▽当日選者　大岳水一路・神尾季羊・黒木爽岳・辺見京子・森重昭

▽懇親会　当日行事終了後、青畝先生と入賞者を囲む簡単な懇親会を計画しています。準備の都合上参加希望者は十月末日までに鹿児島市下伊敷町二〇六〇の二二〇　竹田琅玗（〒八九〇）まで御連絡下さい。（会費二千円程度）

主催　社団法人　俳人協会

後援　朝日新聞社

俳壇消息

俳句文学館利用の「出版祝賀会」

俳句文学館会議室を会場としての出版祝賀会は次のように開かれた。

▽八月二十七日＝浅野正さんの句集「習志野」、大場美夜子さんの句集「雪解川」、小田実希次さんの句集「魚河岸」の合同祝賀会が「春嶺」の主催で。

▽九月十日＝阿部青鞋さんの句集「続次門集」、同月十八日＝馬酔木の中村四條さんの句集「岩菲」、三十日＝風の宮岡計次さんの句集「赤土」。

いずれも参集者多数のなごやかな集まりであった。（係）

会員退会

滋賀二郎（8・15）馬酔木　水本祥壹（8・20）かつらぎ　山岸典子（9・2）河

会員逝去

三田青里（1・24）雪解　内田はるき（8・19）曲水　金子麒麟草（9・10）かまつか　三溝沙美（9・23）ホトトギス　金子伊昔紅（9・30）馬酔木

【お願い】

会員逝去の場合、会長名による弔詞とご香料を差上げておりますが、今回名簿作成のための依頼ハガキを出したところ、既に故人となっていたというのが七件ありました。今後は会員を推挙された結社でその都度遅滞なくお知らせ下さるようお願いいたします。

【会員名簿作製について】

まだご返信なき方は、至急ご回答下さるようお願いいたします。○本年度新会員の分は事務局にて処理済。（係）

編集室から

毎月一日刊行予定の本会報であるが、今月は原稿や印刷所の都合で、四、五日延引しそうである。おわび申し上げる。

十月から十一月はなにかと忙しい。角川さんの三回忌、桂郎さんの同じく三回忌。協会では岡山吟行会、鹿児島の九州大会。よろしくご協力を願う。京都の色短展もそろそろ幕が開く。初めての試みだけに、成功して欲しいものである。

金子麒麟草、草野馳王、三溝沙美、金子伊昔江、俳壇の長老ともいうべき四氏の訃がつづいた。会員諸兄にはくれぐれもご自愛を願いたい。

裏の空地のねこじゃらしが風にそよいでいる。秋も深くなって来た。（草間）

謹告　来る十一月十六日（水）は、事務局員慰安旅行のため臨時休業といたします。

社団法人　俳人協会
俳句文学館

「自註現代俳句シリーズ」より抜粋

『福田蓼汀集』より

早苗束抛りし空の浅間山　昭和一一年作

火の山をめぐる街道の盛衰。荒涼の景観も、ささやかな山田も甦る。浅間を背景に、蒼空に弧を描く早苗束の緑。

『柴田白葉女集』より

芽木明りさびれし港ありにけり　昭和四二年作

小さい漁港。昔は相当な水揚げがあって栄えたという。今はひっそりとして岡には芽を吹きはじめた木々に日があたっているのみである。

『百合山羽公集』より

探梅や途すがらなる杣の梅　昭和二年作

探梅という季題にひかれて詠んだ句だが実景は経験しているのですらすらと出来た。どこか文人画のようだと思った事も事実だ。

『阿波野青畝集』より

初富士を隠さうべしや深庇　昭和三年作

広重の五十三次からの発想である。私は額田女王の歌をそらんじていた。万葉調の隠さうべしやを使ってみようとした。

自註現代俳句シリーズ

第一期三十冊（五十音順）※印既刊

※阿部みどり女集、※相生垣瓜人集、阿波野青畝集、※石塚友二集、上田五千石集、大野林火集、岸風三楼集、※岸田稚魚集、木村蕪城集、清崎敏郎集、※香西照雄集、※後藤比奈夫集、※篠田悌二郎集、柴田白葉女集、※鷹羽狩行集、富安風生集、※成瀬桜桃子集、※野沢節子集、橋本鶏二集、原裕集、※平畑静塔集、福田蓼汀集、※細見綾子集、※水原秋桜子集、※皆吉爽雨集、※宮津昭彦集、※森田峠集、山口誓子集、山口青邨集、百合山羽公集（著者の都合により一部変更があるかも知れません。）

新書版　一六〇ページ　カバー付。一ページ二句組　三百句を収め、一句ごとに自註を附す。

一冊八五〇円（送料一二〇円）　第一期三十冊一括申込二万二千円（送料共）

八月配本　篠田悌二郎集　岸田稚魚集

九月配本　福田蓼汀集　柴田白葉女集

十月配本　岸風三楼集　百合山羽公集

申込先　東京都新宿区百人町三―二八―一〇
社団法人　俳人協会
電話　〇三（三六七）六六四一番
振替　東京　六―三七五番